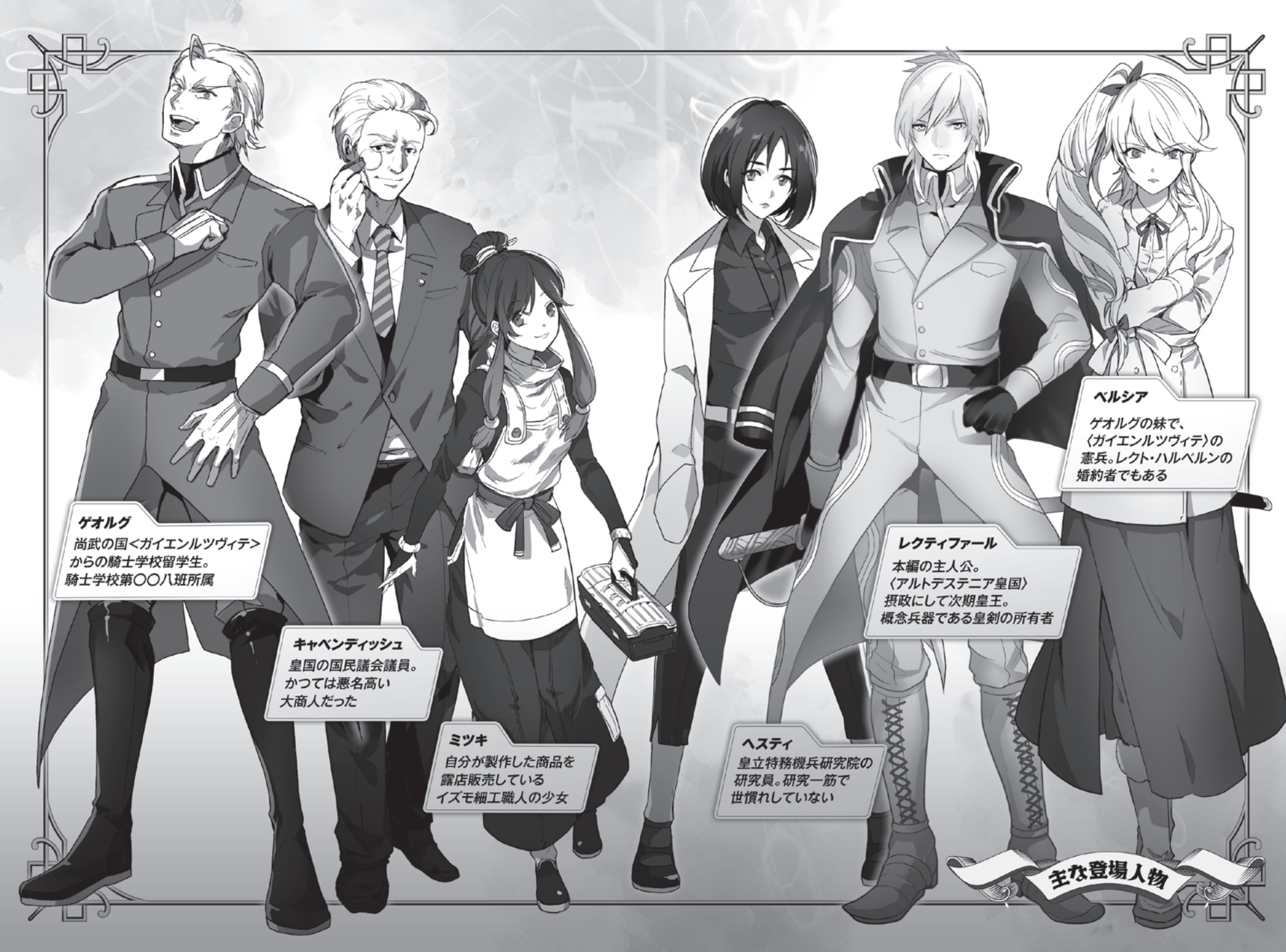
白の皇国物語
15


ゲオルグ
尚武の国<ガイエンルツヴィテ>からの騎士学校留学生。騎士学校第〇〇八班所属
キャベンディッシュ
皇国の国民議会議員。かつては悪名高い大商人だった
ミツキ
自分が製作した商品を露店販売しているイズモ細工職人の少女
ヘスティ
皇立特務機兵研究院の研究員。研究一筋で世慣れしていない
レクティファール
本編の主人公。〈アルトデステニア皇国〉摂政にして次期皇王。概念兵器である皇剣の所有者
ベルシア
ゲオルグの妹で、〈ガイエンルツヴィテ〉の憲兵。レクト・ハルベルンの婚約者でもある
主な登場人物

目次

第一章　レクティファールの誤算　9

第二章　セプテントリオン　81

第三章　ベルシア　131

第四章　レクト・ハルベルンとして　182

外伝　紅（くれない）の城　255

伝説というにはあまりにも滑稽(こっけい)で。
喜劇というにはあまりにも破壊的で。
教訓というにはあまりにも刹那(せつな)的で。
運命というにはあまりにも不憫(ふびん)で。
結局のところ、彼女たちを示す言葉は『皇王レクティファールの皇妃』に落ち着く。
我々はそのような女性たちを母として育った。
彼女たちは母親として我々を愛してくれたし、我々もあの数多(あまた)の女性たちを分け隔てなく愛している。だが、父と一緒にいる母たちは我々の目から見ても年頃の娘だった。
あの状態の母たちを『母』と呼ぶのは、ものの分別がつかない幼い弟や妹たちだけだ。
世の理(ことわり)をある程度知ってしまえば、あの愚にも付かぬ騒々(そうぞう)しい日々は、彼らの過去の焼き直しなのだと分かる。

我々がまだこの世界のどこにもいなかった頃の幻想。
父が単なる男であり、母が単なる女であった頃の日常。
我々はそれを見て育つ。
そして学ぶのだ。
我々の両親を範とするのは、あまりにも危険だと。

――後宮改修工事に伴う区画整理で床下から発見された、とある皇子の日記より

第一章　レクティファールの誤算

最近レクティファールは家臣たちに、機嫌が悪い婚約者を宥める方法を訊ねることが多い。
問われた家臣の大半は家庭を持っている者で、その苦労を知っていることもあり、レクティファールの問いに対して真剣に、そして親身になって答えた。
しかし、それが実を結んだという話はあまり聞かない。
「どうにも、難しい話ですな」
リンドヴルム公爵家皇都屋敷。
食事をともにしたあと、いつものように酒を酌み交わしながら近況を話していたアルフォードの言葉に、カールはさもあらんと天を仰いだ。
「あのふたりは仲が良かった。それこそ実の姉妹のように育ってきました。奥方様の一件もあって、いささか歪ではありましたが、お互いに妹、そして姉と見ていたのは間違いありません」
主従を超えた繋がりは、貴族社会ではそう珍しくない。

こうした関係があってこそ人として真っ当な価値観が形成される、と信じられているためだ。
皇国の貴族は確かに特権階級だが、その実情は世襲制の官僚に近い。責任を果たすのに必要だから貴族という地位が与えられるだけで、実務をこなせない者はあっさり爵位を取り上げられてしまう。
もしも貴族が家と名を守りたいと思うならば、後継者を一廉の人物に育てなければならない。幼くして跡を継ぐ場合など、多少の事情は斟酌されるものの、すでに成人していたら、一切の言い訳は許されない。国は彼らの家が蓄積した経験を求めているのであり、彼ら個人かその家に意味を見出しているわけではないのだ。
裏を返せば、そういった経験を活用できるよう後継者を育てることもまた、貴族として国に対して果たすべき責任だと言える。
「――教育を間違ったか」
カールが呻くのも無理はない。
彼は、ふたりの子どものどちらにも、公爵家の跡取りとして必要な教育を施したつもりだった。
その教育は、たとえ跡取りにならずとも国のためになる。
エーリケは少し不真面目な部分もあるが、自らの責任から逃れるような卑怯卑劣な男ではない。
メリエラは若い分、荒削りな部分はあるが、己のやるべきことに対する姿勢は至極真面目だ。
だが――

「真面目に過ぎましたな」
「だな」
カールはアルフォードの言葉に深々と頷いた。
常に正しいことを正しく実行するのを躊躇わない。人に優しく、必要ならば厳しく、他者のために苦労することを厭わない。まさにメリエラは、貴族の中の貴族だ。
しかし、真面目さも過ぎれば頑固となり、偏狭となる。
「愛することさえも真面目とは、我が娘ながらなんとも難しく育ったものだと思う」
「うちの娘も似たようなものです。だからこそ気が合ったのでしょうが」
互いを支えている間は良かった。それぞれが相手の足りない部分を補い合い、高め合う関係だった。
「相性が良かった分、拗れると面倒だ」
「拗れるなんてものじゃありません。お互いが何を考えているか完全に理解している間柄で、男を取り合う。――考えただけでも恐ろしい」
「ああ、恐ろしいな」
カールは、千年を生きた白龍は、身体の奥底から震えた。
まるでもうひとりの自分を憎み、もうひとりの自分と相争うようではないか。
どれだけ思考を巡らせようと、相手にはそれが手に取るように分かるし、相手の思考もまた簡単に

理解できる。
これを恐ろしいと言わずに何を恐ろしいと言えばいいのか。
「下手を打てば一生の障りになる。もしそうなったら、妻に何と詫びればいいか」
「さりとて、我々にできることなどありましょうか」
アルフォードは現状に歯痒さを感じつつも、自分が何らかの形で事態の収拾に寄与できるとは思っていなかった。
娘同士の揉めごとに親が――それも男親が首を突っ込んでもろくなことにならないのは、この上もないほど明白である。カールも同じ結論に達したからこそ、こうしてただ酒を呷っているのかもしれない。
「ここはひとつ、殿下の男気を信じてみるしかないかと」
「――やめてくれ、余計に不安になる」
悲しげに顔を顰めたカールの言葉も至極もっともである。
レクティファールは、公人としては必要な決断力を有している。しかし、私人としての彼の決断力を信頼できるかと言えば、カールは全力で頭を横に振るだろう。
「殿下の親の顔を見てみたいものだ。よくもまあ、あのような人物を育てた」
「ははは、意外とお館様に似ている方かもしれません」

それは、カールの過去をよく知るからこその言葉だ。
側室を持たずとも、カールは若い頃から多くの女性たちと関わりを持ってきた。
刃物を振り回す女から逃げたことも一度や二度ではない。そう考えれば、カールは正しくエーリケの父親であり、レクティファールの父代わりなのだった。
「だからこそ、不安なのだ」
その表情は、アルフォードがこれまで見たことがないほど情けないものだったという。

レクティファールはそれなりに頭が回る。
だが、女性に対する場合は、下手に頭を回すと余計な厄介ごとを招き寄せることを知っていた。これまでそれによって多くの生傷を作ってきたのだ、いい加減学習もする。
だからこの日も、机に肘をついたレクティファールは余計なことを考えず、ただ真実のみを後宮の自室に呼んだメリエラとウィリィアに告げた。
「ウィリィアは側妃にする」
それは、様々な事情を加味して下した決断だった。
私人としての考えも多少含まれてはいるが、大半は公人としての考えからもたらされたものだ。
しかし、その言葉はメリエラの逆鱗に触れた。

「――!!」
彼女はレクティファールの言葉を頭の中で数百回繰り返し、そして自分が理解している世の道理と並べ較べて呑み込むと、一気に怒り狂った。
「レクト……自分が何を言っているか分かる？」
「分かりますとも、今後のふたりの人生に大きく関わることです」
「だったら……！」
メリエラはレクティファールに近付くと、机に両手を叩きつけた。
「なんでそんなことになったの!?」
「そんなことと言われましても、これが必要だと判断し、ウィリィアにも訊ね、結論を下したまでです」
怒りに歪んだメリエラの相貌を見ても、レクティファールはまったく臆する気配がない。彼の背後に控えるマリカーシェルが、目の前の龍族が発する怒気に身体が反応するのを抑えるために苦労していたにも拘わらず、だ。
「ウィリィア！」
「はい」
メリエラに名を呼ばれ、ウィリィアは毅然と主人に向き直る。

ここで怯えるような真似はできない。もしそんな態度を取れば、単に言葉を弄するよりも主人を貶めることになってしまう。
「どういうつもりなの？　わたしがあなたにそれを求めると思った？　確かにわたしとあなたの立場は違う。だけどそれは白龍の家の中でのこと。その家から出てまで続けるつもりはないわ」
そう言いながらも、メリエラはウィリィアが自分に遠慮してその結論を出したとは思っていない。これは、ある意味でメリエラに挑むようなものだ。
権威としては正妃が上だが、側妃には側妃にしかない特権がひとつだけある。
それは様々なしがらみから逃れ、ひとりの女として夫に接することができるという点。
情が深い者ならば、この上ない特権だろう。
メリエラでさえ、許されるならば側妃でいたかったと常に思っているほどなのだから。
だから、納得できない。
メリエラは本心ではただひたすらに、ウィリィアと同格でありたいと願っていた。同じ男を前にして、同じ立場でその寵を争いたい。
メリエラは自分とともに成長してきた姉のような女性を、自分よりも優れていると思っている。否、妬んでいる。
容姿や家の格といった自分の意思が介在しない部分ではなく、生まれ落ちてからの努力によって積

み重ねられた部分において、自分はウィリィアに劣っていると考えていた。
だから、せめてこれだけは、同じ戦場で同じ条件で戦いたいと思っていたのだ。
それならば負けても諦めがつく、少なくとも自分を納得させるだけの理由を見出すことができる。
しかし――
「姫さまは決してそう望まないと思いました。ですが、これがもっとも姫さまのためになると考えたのです」
ウィリィアはそんなメリエラの意図を知った上で、拒否した。
「わたしのため……ですって？」
「はい」
ウィリィアにはウィリィアの考えがあった。
無論、メリエラに先んじたいという本心がわずかにでもあったことは否定できない。
しかしそれを差し置いても、ウィリィアは正妃という道を選ぶことはできなかった。
「姫さまはもう、おひとりで進むべきと存じます」
「――――」
ウィリィアの言葉にメリエラの怒りが一瞬途絶え、困惑に取って代わる。
「これまで姫さまには良くしていただきました。ですが姫さまは、わたしの向こうに亡くなった奥様

を見ておられた。おそらくあの日からずっと」
顔を伏せたウィリィアの睫毛が震えている。
あの日以来、メリエラはより一層ウィリィアに懐いた。
そしてウィリィアもまた、メリエラを守ることで自分の心を守るようになった。
傍目には、悲しみを乗り越えるために幼い主従が寄り添っていると見えただろう。カールでさえそう考えた。
だが、現実はわずかに異なる。
彼女たちは互いに依存した。
メリエラは母をよく知り、その背を追いかけていたウィリィアに母の面影を重ねる。そして傍らにいることで、崩れそうになる自己を保った。
ウィリィアは己の罪の意識を少しでも軽くするため、やはりメリエラを必要とした。己の存在価値の証明として、主人の健やかな成長を必要とした。
メリエラは庇護者としてのウィリィアを欲し、ウィリィアは被庇護者としてのメリエラを必要とした。そんな状況に、幼い本人たちさえ気付いていなかった。
そして成長するに従い、そうした本能から始められたことは、大人としての理性と良識に覆われて当たり前のものとなってしまっていたのだ。

「姫さま、もうお気付きになっているのでしょう？　わたしたちはもうお互いに、過去から目を背けることはできないのだと」
他者と歩むための通過点である恋愛こそ、ふたりの関係に終止符を打つものだったのは、必然と言えた。
どれだけ家族を大切に思っている者がいたとしても、大半はやがて、家族以外の誰かとともに生きていくことになる。
メリエラとウィリィアも、自覚がないままその一線を越えていた。険悪な空気になっているのは、きっかけを作ったのが同一の人物だったから、というだけのことだ。
「ウィリィア……」
メリエラはウィリィアの強い意思の込められた視線にたじろいだ。
これまで自分に対して、ウィリィアがこのような目をすることはなかった。
諌めることはあっても常に味方であり、掛け替えのない『姉』だった。しかし、今彼女の目の前にいるのは、その『姉』の姿をした『女』だった。
自分と争うことさえ辞さない『他人』がそこにいた。
「――――」
それ以上は何も言葉を発することができないまま、メリエラはレクティファールの前から走り去る。

「メリア！」
思わず追いかけようとしたレクティファールだが、肩をマリカーシェルによって押さえ込まれる。
彼女の内心を示してか、そのまま後ろに倒れてしまいそうなほど、強い力だった。
「殿下が行っても無意味とは言いませんが、拗れるだけです。メリエラ様は全部分かっておられるのですから、あとは自分で自分を納得させるだけです」
出来の悪い弟を諭すようなマリカーシェル。
ウィリィアは彼女の姿に、自分とレクティファールを重ねる。
あの頃は良かった。
だが、あの頃に戻りたいとは思わなかった。
「殿下、わたしも失礼します」
「分かった。メリアをよろしく」
レクティファールは微笑を浮かべ、ウィリィアにメリエラを託す。
たとえふたりの関係が変わろうとも、ウィリィアがメリエラの姉のような存在であることは変わらない。
「はい」
ウィリィアは、これまでレクティファールには見せたことのない優しい表情で頷いた。彼女の中で

起こった変化が、その表情から険を減らしたようだ。
「それでは」
一礼し、扉をくぐるウィリィア。
彼女の後ろ姿を見て、マリカーシェルは羨望を感じずにはいられなかった。
（成長の持つ美しさは、若い娘にしかないわね）
口に出そうものなら、確実に同僚たちにからかわれるであろう思い。
マリカーシェルは、自分も随分歳を取ったものだと、少しだけ寂寥感を覚えるのだった。

◇　◇　◇

皇国の文化のうち、およそ三割は隣国の〈イズモ神州連合〉からもたらされたものだと言われている。
冬の時期に行われる『銀星祭』もそのひとつで、これは家族とともに銀色の星を飾った針葉樹を囲み、宴を催すものである。
可能な限り家族など、大切な人々と一緒にいるべき日とされ、仕事を早めに切り上げる職場も少なくない。しかしそうした特徴から、家族以外の誰かと夜を過ごす日という側面も与えられるように

なった。
たとえば友人たちと夜通し騒いだり、恋人と一緒に過ごすことも考えられる。もちろんそんな特別な日であっても、仕事がある者たちはいるが。
ただ、皇国の多くの人々はこの日を楽しみにしていた。国を挙げての特別な日で、商人たちはこれを盛り上げて商機にしようと企んでいる。
また、普段はきっかけを掴めずに、気になる異性に声を掛けられない者にとっては好機と言える日だった。
特に、若者たちはそう考える傾向が強かった。
皇国軍の最高学府である騎士学校でさえ、例外ではない。

「だいぶ盛り上がっているようですね」
「は、はい」
レクティファールは『レクト・ハルベルン』として、もはや着慣れたと言ってもいい士官の軍装を纏い、騎士学校の敷地を歩いていた。
隣を進むのはわずかに顔を俯かせたタキリ・イチモンジ。彼女はレクティファールの言葉に答えながらも、腰の前で忙しなく指先を動かしていた。

（うわあああああああああっ、マリア様、何故わたしなどにこのお役目をぉ!!）
実は彼女、騎士学校に籍は置いてあるものの、今は海軍本営で実務研修を受ける立場にあった。本来なら今日もそのはずだったのだが、朝登庁するとすぐに元帥官房からの使いが来て、騎士学校へ向かえと命じられたのである。
何かの手続きが必要になったのかと首を傾げつつ騎士学校へと辿り着いた彼女を出迎えたのは、陸軍の軍装に身を包んだレクティファールだった。
その姿を見付けたときに「うひぇあ」と意味のない悲鳴を上げたことは、タキリにとって忘れたい記憶である。
「みんな浮ついているようにも見えますが、やはり祭は誰にでも平等ですね」
レクティファールは嬉しそうに候補生たちの姿を眺めている。
ただ軍務に必要な知識を学ぶだけではなく、何故この国を守るのかを見出すためにこそ、あらゆる軍学校は存在している。
そこで経験した日々を糧として、若き軍人たちは防人の任務に就くのである。
「毎年、似たような雰囲気になります。講義室でもそういった話ばかりで……」
「いいことじゃないですか。実に羨ましい」
羨ましいというレクティファールに、タキリは思わず顔を上げた。

世間一般の認識として、皇王――正確にはまだ皇太子だが――人々が望むあらゆるものを手に入れた存在だ。誰かを羨むことなどあり得ないと考えられている。

しかし、タキリの目の前にいる青年は、そうした評価にまったく当て嵌まらない。

「青春、青春。こういう時期は本当に貴重でしょう。あとになって欲しがっても、そうそう手に入るものじゃない」

「マリア様は、その、自分は常に青春を謳歌していると仰っていましたが……」

「本人がそう信じているならそれはそれでいいんじゃないですか？　私はあれを青春とは認めたくありませんが」

人のことを面白おかしく玩具にすることが青春であってたまるものか――レクティファールは少しだけ遠くを見詰めた。

「それなら、レクト様はどのようなものを〝青春〟だと思われますか？」

タキリはまともな会話が続いていることに内心飛び跳ねるほどに喜びつつ、外面は落ち着いた姿を崩さないまま、レクティファールへの質問を続けた。

「同じ立場、同じ記憶を持つ仲間と、とりあえず何かをして盛り上がることですかね。ひとりで静かに過ごすことが青春という人もいるでしょうし、誰かと恋をすることが青春であるという人もいるでしょうが、私はどうにも色々考えるのは苦手ですから」

「ふふ……ならわたしも同じです。士官学校の同期の中には恋を楽しみ、莫迦騒ぎを楽しむ子もいましたけど……」

何度その手伝いをさせられただろうか。

だが、それさえも懐かしい思い出である。今となっては、同期たちとまともに顔を合わせることもない。

明確な修了式典がない騎士学校では、毎日の何気ない別れがそのまま生涯の別れになることも珍しくなかった。

タキリの同期でさえ、事故で命を落とした者がひとりいる。

戦場ではなかったため、比較的綺麗な姿で家族のもとへと帰ったが、それが幸運とされるのが彼女の仕事なのだ。

「それに、わたしがいるとどうしても場が緊張してしまいますから、あまりそうした場には顔を出さないようにしていました」

異母兄のフガクには、そこまで気を使う必要はないのでは、と言われていたが、相手の立場で考えてみれば、私的な集まりで自分のような立場の者――候補生総長と席を同じくしたいとは思わない。

業務時間外に上司や上官と会うことほど気分が滅入るものは、そうそうない。

「気持ちは分かりますよ。どちらの気持ちもね」

レクティファールは慰めるような言葉を口にしなかった。
ただ同意し、その判断が暗に間違っていなかったことだけを伝える。
タキリがわずかに微笑み、レクティファールはそれを見届けてから周囲に意識を向けた。
先ほどよりも候補生たちの姿が増えている。どうやら講義が終わる時間だったようだ。
雑談をしながら道を並んで歩く若い候補生たちの姿は、市井の学生とほとんど変わらない。纏っているのが候補生の軍装でなければ、ここが騎士学校の敷地だとは気付けないかもしれない。
（これも、彼らが命を懸けて守る風景のひとつかもしれないな……）
レクティファールは脳裏に国主としての思考を挟みつつ、候補生の集団とすれ違った。
そしてそのまま三歩進んだところで、前方から上擦った声が聞こえてきた。
「どうかお願いします!!　一度だけでも、お食事だけで結構ですから!!」
男子候補生の声だ。
はて何事だろうかとタキリと顔を見合わせ、レクティファールは声のした方へと進んでいく。
「あ、あの！　すみません、そういうのは……」
「お願いします！」
敷地内にいくつか分散している講義棟、そのひとつの前に人だかりができている。
声は人だかりの中から聞こえてきているようだ。

「ですから、わたしはそういうことをするために、こちらにお邪魔しているわけでは……」
「お願いします！」
声は聞こえども姿は見えず。レクティファールは人垣の外で目を細める。
「ふむ、片方はどこかで聞いたことがある声なんですが……」
「お知り合いですか？」
「世の中にはほとんど同じ声を持つ人もいますから確実ではありませんが、多分そうでしょう」
レクティファールは人垣の外にいる候補生に声を掛ける。
「そこの君」
「え、何、今面白いところ――し、失礼しましたっ!!」
候補生は心底不機嫌そうな顔で振り返り、そこにいるのが現役士官であることに気付くと、慌てて敬礼する。
「何か御用でしょうか!?」
「うん、何があったのかなと思ってね」
緊張で裏返ってしまった声に関しては触れず、レクティファールはこの状況について説明を求めた。
「はっ、候補生が外部講師の女性を銀星祭に誘ったとのことであります！」
そう言い切ってから、彼は自分の口にしたことの危うさに気付いた。

目の前の現役士官が、候補生の私的な行動に厳しい考えを持っていないとも限らない。候補生同士ならば多少の目こぼしも期待できるだろうが、外部の人間を巻き込んでとなると、問題が大きくなってしまう可能性も否定できない。

「あ、あの、候補生は決して周囲の威圧感で相手の女性を脅かそうとか、そういう意図があったわけではなく、単に講義が終わったのを見計らっただけでして……」

「うん、まあ、自分の縄張りでそういう断りにくい雰囲気作るのは、あまり褒められたことではないね」

「ええ、本当に」

タキリが呆れたように溜息を吐く。

周囲を屈強な候補生たちに囲まれた状況で、冷静さを保てる者がどれだけいるだろうか。

これは騎士学校としての醜聞に繋がる可能性がある――そう判断した彼女は、意を決して人垣に飛び込んでいった。

しかし、すぐに悲鳴が聞こえてくる。

「え？　ちょっと、あなたたち、ひゃ!?　今お尻触ったの誰!?　う、うわわわ……」

タキリのことなど誰も気に掛けていないのだから、突然割り込んだところで道が開けるはずもない。彼女は予想外の状況に慌て、自分がどちらに進んでいるかも分からないまま、必死に人を掻き分ける。

「はぁはぁはぁ……」

最近は軍人としてではなく、イチモンジ家の一員としての仕事の方が多かった。そのせいでろくに鍛錬の時間が取れず、かなり身体が鈍ってしまっていた。

（今夜から、鍛錬の時間増やそう……）

そうしたところで、実際にそれが役立つ場面に送り込まれる可能性は低い。彼女は名門イチモンジ家の宗主であり、蒼龍公の血に連なる者なのだから。

「食事だけでいいんです！　一度だけ！　それだけで結構ですから！」

「いえ、ですからそういうわけにも……！　あの、手を離してください！」

タキリが人混みの中でもがいている間に、中心部ではさらに状況が進んでいるらしい。女性のせっぱ詰まった声が聞こえてくる。

（まずい。男の方が周囲の雰囲気に呑まれそう！）

周りにいるのが自分の味方だと錯覚し、気が大きくなっているのかもしれない。

「ちょっと、どいて！」

タキリは声を荒らげた。これ以上身内の恥を晒したくないと思ったのか、それとも銀星祭にかこつけて盛り上がっている男女に苛立ったのか、それは本人にも分からない。

（ぎ、銀星祭なんて単なる年末の在庫処分の日だし）

皇国有数の商人貴族であるところのレヴィアタン公爵家と縁戚関係にあるだけあって、タキリもまたそうした経済の動きには敏感だった。さらに言えば、士官は戦争という〝経済活動〟に専門的に従事する以上、余人よりも経済に精通していなければならないという皇国軍の方針もあり、士官教育を受けた者は皆、ある程度の経済知識を備えている。

その知識でもって銀星祭という催事を見れば、それが冬場に滞りがちな一部の経済活動を活性化させるための手段であると分かる。

（寂しくない……寂しくない……）

タキリは自分にそう言い聞かせながら、あと少しで人混みを抜けるというところまで進んだ。

「わ、わたしにはもう結婚を約束した方がいますから……！」

「教官には特定のお相手はいらっしゃらないと伺っています！」

「う、うう……」

どうやら女性はかなり追い込まれているらしい。

このままだと勢いに負けてしまいそうだ。

「ごめんなさい！　通して！」

しかし、前列に向かうに従って、人の密度は高くなっている。

タキリはなかなか前に進めない。もっと大きな声で――と、タキリが息を吸い込んだそのとき、彼

女の手を誰かが掴んだ。

「え!?」

誰だ、と思わず振り返ろうとした彼女の隣を、その手の主が通り抜ける。

「――失礼するよ」

「レ――！」

レクティファールだ。

タキリは驚く間もなく、そのままレクティファールに引っ張られていく。

これまで彼女が散々苦しめられていた人垣も、レクティファールが少し声を掛けるだけで真っ二つに割れていく。

一体どうして、と思うタキリがレクティファールの進む先へ視線を向けると、前方にいた候補生が何かに怯えるように背後を振り返り、慌てて道を空けていることに気付いた。

（な、なんでみんなそんな怯えたような顔を……）

手を引かれる彼女の位置からは、レクティファールの表情を見ることができない。だが、似たような光景を見たことはある。

（マリア様だ）

タキリが公都ペイフェルに挨拶に赴いた際、マリアに連れられて街に出たことがある。お忍びの視

察という話だったが、今から思えば可愛げのない子どもだった自分を少しでも楽しませようというマリアの心遣いだったのではないだろうか。
だが視察の最中、喧嘩の現場に出くわした。
マリアは当初面白そうに眺めていたのだが、やがて一対一の喧嘩の熱気が周囲に伝播し、暴動へと発展しかけた。マリアはタキリに笑いかけてその場で待つように言うと、人垣の中へと優雅な足取りで進んでいく。
（最初は、誰もマリア様に気付いていなかった。でも、人垣に近付くと誰もが振り返り、慌てて道を空けた）
それは動物的な本能だ。
平穏な社会の中でどれほど鈍っても、絶対に忘れることができない絶対的強者。超越者への畏怖。当人が考えるよりも早く身体は動くのだ。
「レクト様！」
「静かに」
ここで目立つのは得策ではない。あまりに騒ぎが大きくなれば自分では抑えきれなくなる。タキリはレクティファールをその場に押し留めるべく握り締められた手を引っ張ったが、彼の答えは静かな拒絶だった。

「どうにも知り合いのようでして、ここで放っておくのは気分が良くない」
「気分って……」
タキリはぎょっとした。
しかし、反論が自分の中にないことに気付く。
気分、そう気分だ。それだけでこの男はあらゆることを行うのだ。
そうでなければ、イチモンジ家のタキリとして、使命のことばかりを考えていた自分のような女を、このような場にまで引き摺り出すことはできなかった。
「――――」
それに思い至ると、途端にレクティファールの手に包まれている部分が熱を持つ。その熱が腕を伝って心臓に達し、鼓動が倍ほども速くなった気がした。
（な、なんでこんな……）
タキリは不承不承ながらも、恋心の存在を認めた。認めざるを得なかった。そうしなければ説明できないことが山のようにあったからだ。
しかし、それは理性によって制御できるはずだと信じていた。恋慕の情も感情であるならば、怒りや悲しみと同じように律することができるのだと。
だが、一歩進むごとにタキリの顔は赤く染まっていく。

手を繋いでいるだけで。
「あ、ああ、あの……！」
手を離してもらおう。そう決断してタキリが顔を上げる。
ちょうどそのとき、ふたりは人の海を越えた。
そこにいたのは、ヘスティ・ラ・フリーガシンだった。

ヘスティはこの日、軍と特機研の間で交わされた協定に従い、新型自動人形に関する基礎的な学習の教官として騎士学校に赴いていた。
講義もすでに五回目。最初は大いに緊張してまともに喋ることもできなかった。しかし、教える相手が教官に対して失礼のないようにすることを徹底的に叩き込まれた候補生たちであるのは幸いだった。徐々に慣れて、今では研究所で同僚や上司に説明を行うときと変わらない態度で、教官としての任を遂行することができるようになっていた。
（明日は砲兵の講義よね。あの資料って機密分類どれだったっけ？）
候補生たちの敬礼を受けつつ廊下を進み、ヘスティは翌日の講義に使いたい資料が候補生たちに開示できるものだったか思い出そうとしていた。
特機研が扱う機密情報は、国が設定する最高階級の機密から、特機研が独自に設定している管理秘

密まで幅広い。軍や特機研が決めた分類の機密情報は、申請さえ行えば候補生たちに開示することも可能なのだ。
できるなら候補生たちにもっとも役立つことを教えたい。ヘスティは情報開示申請書の文面を考えながら、講義棟の外に出た。
「うう、寒くなったなぁ」
意地の悪い風が、身体を縮こませた彼女の首筋から熱を奪っていく。
騒動に巻き込まれてしまった北の地よりは遥かにましだが、湖の中に浮かぶ群島の風は非常に冷えている。夏ならば涼しい風を運んでくれる湖は、水温の方が気温より高くなる本格的な冬になるまでは彼女の敵だった。
「明日はもうちょっと厚着してこよう」
講義室は暖房が効いており、さらに身振り手振りで説明を行うこともあって、こうして外に出ない限りは寒さを感じない。だが、一歩外に出ると上着を羽織っても寒さを防ぐことができない。
騎士学校の敷地は広く、建物の密度はあまり高くなかった。そのせいで風を遮るものがなく、湖の上で冷やされた風がそのまま吹きつける。特機研も似たようなものだが、そもそも特機研にいるときの彼女は自分の研究室に籠もりきりだ。
（ここ数年、ずっとそんな感じだったから、冬がこんなに寒いって忘れてた……）

教官職も、去年の自分だったら間違いなく固辞(こじ)していただろう。
他人にものを教えるなど、自分には絶対に無理だと断言できた。
だが、ここ半年の間に起きた様々な事件が、彼女の己に対する評価を変化させた。
おそらく自分に教師は向いていない。しかれども、それを理由に人にものを教えてはならないということはない。向き不向き、得手不得手は誰にでもある。それを理由に己の道を決めるのもいい。しかし、必ずその道を進まなければならないという道理もないのだ。
「やってみれば結構楽しいしね」
人に何かを理解させる。それも研究所の人々と違い、前提となる知識を持たない者に理解させなければならない。
客観的に見て自動人形とは如何(いか)なるものか、高度な専門知識を持たないまま将来自動人形を扱うことになる士官たちに何を伝えるべきか、ヘスティはそれを考えるようになった。
「今度の論文、これを題材にしようかな」
彼女はその言葉通り、一カ月後には軍における自動人形運用を題材にした論文を書き上げることになる。それは『新・機兵論』という名で皇国どころか世界中へと広まり、やがて星の海さえ越えた先にまで到達する。
「へくちっ」

しかしそれを本人が知ることはなく、彼女の存命中はあくまで皇国の軍人たちの間で読まれ、研究されるだけの論文だった。
「うー、早く戻ろう」
少し歩調を早めるヘスティ。
早く戻って申請書を提出し、講義の準備をしようと思った。
その背に声が掛けられた。
「教官！　フリーガシン教官！」
「はい？」
こうして声を掛けられるのも珍(めずら)しいことではない。大抵(たいてい)は講義の内容に関する質問だったり確認であったりするのだが、今回は少し様子が違った。
講義棟から走ってきたのは、いつも熱心に彼女の講義を聴いている候補生なのだが、妙に視線が泳いでいる。立ち止まったヘスティの前に立っても、彼の目が彼女へまっすぐに向けられることはなかった。
そしてそのまま、候補生はヘスティに右手を差し伸ばす。
「銀星祭(ぎんせいさい)の日、ご一緒に食事など如何(いかが)でしょうか⁉」
ヘスティは一瞬意識がどこかへ吹き飛んだ。

「へ？」
間の抜けた声を発する彼女に、候補生はさらに言い募る。
「お忙しい教官のお手は煩わせません！　総て自分が取り計らいます！」
反論を許さない機関砲のごとき言葉の連続。
ヘスティの頭脳が再起動を果たしたとき、ふたりの周囲には候補生たちが集まり出していた。
それに気付いたヘスティが慌ててしまい、状況はより悪化する。
もしもこの時点で彼女がはっきりと断っていれば、候補生も諦めた可能性が高い。彼らは若くとも道理を叩き込まれた軍の士官候補生だ。感情に任せて相手を押し切るような真似はしない。
「いえ、わたしはそういうことは……」
しかし、ヘスティの態度は、どちらかと言えば拒否、といった程度のものだった。
これでは相手に真意が伝わらない。
普段の彼女を知っていれば、ただ勢いに圧倒されてまともな返答ができないだけだとすぐに分かるが、講義でしか顔を合わせない候補生にそれを期待するのは酷だ。
このときの候補生の目には、タキリがそれほど嫌がっていないように見えた。逃げ出したい自分を必死に抑え込みながら、辛うじて引き攣った愛想笑いを浮かべているとは、まったく考えもしていなかった。

「どうかお願いします!!　一度だけでも、お食事だけで結構ですから!!」
そのとき自分が何と答えたのかさえ、ヘスティは覚えていない。
ただ、候補生がより強く彼女に迫るようになったのは事実である。
（恐い……）
それなりの人生を送ってきたが、ヘスティはこうして異性に食事に誘われる経験がほとんどなかった。その数少ない経験も、顔見知りの研究者が冗談交じりに誘ってきた、というものだ。
学生時代といえば、勉強に没頭してほとんど友人もおらず、従って銀星祭は家族と過ごすかひとりで勉強をしているだけだった。
そのため、彼女は目の前の若者にどう返答すればいいのか分からない。
同僚の研究者にするようにすればいいのか、教官として強い態度に出ればいいのか、それとも個人として拒絶すればいいのか。
（どうしよう、どうしよう……なんか人も増えてきてるし……）
「食事だけでいいんです！　一度だけ！　それだけで結構ですから！」
候補生の名誉のために言えば、彼は多少強引であっても、紳士的な態度を最後まで崩さなかった。
ヘスティに必要以上に近付くこともなかったし、声を荒らげることもしなかった。
ただひとつ、相手が悪かった。

彼は年上の女性を誘うつもりで行動したが、ヘスティを誘うのであれば、同年代か少し年下の女性を相手にするような態度を取るべきだったのだ。
「わ、わたしにはもう結婚を約束した方がいますから……！」
ヘスティは必死に言い訳を考える。
相手の顔に泥を塗らないよう、自然と相手が諦めるよう、仕向けたかった。
しかし、候補生は周密だった。軍人としてまったく正しく、褒められるべき行動力でヘスティの周囲の情報を集めていた。無論、常識の範囲内で。
「教官には特定のお相手はいらっしゃらないと伺っています！」
だからこそ、誘おうと思ったのだ。
恋人の影でもあれば、候補生は皇国軍人として名誉ある撤退を選んだ。己が焦がれた女性はやはり他人から見ても素晴らしい人だったのだと、自分を慰めただろう。
「いえ、実はその……」
ヘスティは必死だった。
もはや恐怖が心の半分を占めていた。
周囲を囲まれ、それが総て敵のように思えてきた。
故に、視界に見知った顔を見付けたとき、彼女は思わず行動していた。

人垣を割って現れた陸軍の軍人に駆け寄り、その腕を取って叫んだのだ。
「こ、この人です！　この人がさっき言ったわたしの婚約者です!!」
ヘスティが取った腕とは反対の手に引かれた女性が、彼女の言葉にもの凄い表情を浮かべていることにも気付かないまま、彼女は全力で叫ぶ。
「ですから、あなたのお誘いにはお応えできません！」
周囲にどよめきが広がった。

◇　◇　◇

ヘスティを銀星祭に誘った候補生は、この返事を聞くとあっさりと引き下がった。彼の態度は爽やかであり、周囲にいた誰もが好感を抱いただろう。
まずヘスティに対して無礼な誘いをしたことを謝罪し、続いて彼女に腕を掴まれたままのレクティファールにも深々と頭を下げて謝罪した。
レクティファールがそれを笑って許したことで、その場は完全に収まった。
しかし、問題はこのあと起きた。
レクティファールの姿を見て、彼が『レクト・ハルベルン』であると気付いた候補生が何人かいた。

騎士学校で色々な騒動の中心にいたレクティファールであるから、それはいささかも不思議なことではない。

そして、レクティファールとヘスティ双方の名前を知っている候補生が、『レクト・ハルベルンとヘスティ・ラ・フリーガシンは婚約している』という噂を流した。

騎士学校の候補生たちが持つ独自の通信網は、軍のそれよりも遥かに早く情報が広まる。範囲が狭いこともあるが、何よりそうした情報に飢えている年頃の者が多いからだ。

畢竟、レクティファールとタキリ、そしてぐったりとしたヘスティが、騎士学校から少し離れた喫茶店に腰を落ち着けたとき、すでに噂は候補生の間では確定情報となっていたのである。

「――うわぁ」

タキリは懐から出した個人情報端末の表示窓を見て、思わずそう口にした。

騎士学校内部に演算機がある、本来は候補生たちが共同研究や団体演習での仲間を探すための情報掲示板には、すでにレクティファールとヘスティの関係について様々な情報が書かれていた。

レクティファールとヘスティの詳細な個人情報まで載っている。どちらもある程度の個人情報を公開している立場のため、それを見つけ出すことは容易かっただろう。

そろそろ特機研にも事実関係を問い合わせる通信が届いているかもしれない。

タキリは冷や汗を流しながらマリアに文字通信を繋ぎ、制御卓一本指打法で状況説明を開始した。

「あああぁぁぁぁ～～……」

その隣で呻くヘスティ。彼女はタキリと同じように自分の端末を使い、研究所内の情報掲示板を見ていたのだ。

案の定、こちらもまた、騎士学校のそれと同じ内容で盛り上がっている。

《ヘスティたんが……奪われた……もう死のう》

《相手誰よ!?　何？　皇国騎士!?　しかも三男坊とか、婿入り嫁入りどっちもいけるじゃん！》

《はっはっは、いやはや、若いとはいいことだ。彼女のお祖父さまにいい報告ができそうだ》

《研究はどうするんだよ。新型の先行量産型がやっと工場の生産工程に乗ったばかりじゃないか》

《でもなんとなく雰囲気変わったと思ってたよ。女は恋愛すると変わるって本当だったんだな》

などなど、かなり好き勝手に書き込まれている。

もはやその流れは止まりそうもない。誰もがヘスティのでまかせを真に受け、それが事実であるかのように受け止めている。

ここ数カ月の間に彼女が変わったことは事実であり、それが一種の裏付けとして機能しているらしかった。

「ひぃ」

ヘスティが頭を抱えていると、タキリが珍妙な悲鳴を上げて端末を放り出す。
ひとり静かに――総ての現実から目を逸らして――お茶を飲んでいたレクティファールは、その端末の表示窓にマリアだけではなく、ルキーティやアナスターシャからの文字通信枠が展開されていることを見て取った。
「私は何も見ていない」
そして、気付かなかったことにした。
偶然マリアが後宮にいて、すでにこの話が彼の婚約者たちの耳に入ってしまったことなど、気付くわけにはいかないのである。
「――!?」
続いて、ヘスティの通信端末から受信を報せる合成音が鳴り出す。
おそるおそるといった様子で端末を操作するヘスティの姿は、まるで考査で赤点を取り、それを隠している子どものようだった。
「うっ」
受信した何かを見たヘスティが呻き、再び卓へと伏せる。ぶつぶつと小さな声で「誰も反対しないとか、わたしの家族は一体どうなってるの?」などと呟いている。
その声は、レクティファールの不必要なまでに高性能な集音機能にも捉えられていたが、今は何を言ったところで慰めにはほど遠いだろうと諦めた。
そしてついに、レクティファールの内にある〈皇剣〉の通信演算領域にも外部から接続があった。接続に付された個別符牒はルキーティだ。
レクティファールは外見ではまったく動揺を見せないまま、しかし内心で嘆息しながら接続を許可する。
〈殿下、ちょっとお話が〉
ルキーティの声は恐ろしいまでに平滑だった。感情どころか生物として最低限の抑揚さえない。まるで人工知性に喋らせているかのようだ。
〈何でしょうか?〉
レクティファールは努めて温和な口調を取った。
何を言いたいのかは分かる。しかしあえて問う形式にしなければ、さらにルキーティの機嫌を損ねることになるだろう。
〈少々面白い話を聞きまして、殿下に事実関係の確認を、と〉
〈面白い話は私も好むところです。笑いは人生を豊かにする〉
〈そうですね。では差し当たってわたしの人生を豊かにしていただきたいのですが〉
そこでルキーティは言葉を句切った。

言葉を選んでいるというよりも、感情そのままの言葉が口から出そうになるのを必死に抑えている風だった。
〈例の噂、事実ですか？〉
〈そういう噂が立つ事態になったことは事実です。ですが、そのような約束を誰かと結んだ事実は存在しません〉
それは精一杯の抵抗だった。
私は悪くない――レクティファールの内心を一言で表すと、こうである。
実際、彼は何もしていない。今回に限れば。
〈そちらで上手く収拾できませんか？〉
〈噂の拡大が早過ぎます。何よりフリーガシン女史とこうした状況になることを想定していませんでしたので〉
ルキーティの言葉は、半分は嘘だった。
レクティファールの周囲にいる独身女性のうち、ある程度の親交がある人物については、何段階かに分けてそうした状況に備えた行動を取る。ヘスティに関しては、まだその段階ではなかったというだけのことだ。
「あ、友達からお祝い来てる」

レクティファールはそんなことを呟いているヘスティを眺めながら、脳裏に響く妖精の声に目を細めた。
〈どうなさいますか？　先ほどルイーズ殿から連絡がありまして、殿下を孝行息子だと褒めておられましたが〉
ウィリィアを嫁に取り、その直後にレクトとしてハルベルン家にヘスティという嫁を迎え入れたのだから、ルイーズの感覚で言えば孝行息子なのだろう。
その感覚が一般的かどうかは別にして。
〈皇府としての意見は？〉
〈良き面も悪しき面もありますが、フリーガシン女史次第でしょう。我々としてはレクト・ハルベルンにより実像を与えることは、そう悪いことではないと考えます〉
レクティファールの虚像として存在するレクト・ハルベルンという男は、書類上はほぼ完全に存在している。
出生から現在に至るまでの総ての記録が用意され、誰がどこで照会したとしても、彼の存在を疑うようなことはないだろう。
無論、人の記憶を作り上げることはできない。しかし、完全記憶といった特殊な例を除き、これまで自分が出会ってきた者総ての顔を憶えている者など、そうそういるものではない。

逆に、実際には面識がないとしても、相手が懐かしそうに過去を語り、その過去の記憶が自分のものと一致していれば、単に自分がその人物を忘れているだけだと思い込むことさえある。
何より、国が全力を挙げて作り上げた虚像だ。それを暴くことができるとするならば、同じ国家だけだろう。
〈ヘスティに負担が掛かりますね〉
〈真実を伝えるかどうかは殿下の判断にお任せします。ですが、皇府としてはどちらを選んでいただいても損をしないだけの差配はいたしましょう〉
〈ルキーティ個人なら？〉
レクティファールの問い掛けに、この国と同じだけの時間を生きてきた妖精は言葉を詰まらせた。
妖精という一種の幻想である彼女にとって、虚像の存在と結婚することになるヘスティはどのように映るのか。レクティファールはルキーティの言葉を待つ。
やがて口を開いたルキーティは、わずかに掠れた声だった。
〈悲しいことだとは思います。レクト・ハルベルンを忘れて普通の相手と番いになり、普通の人生を歩むことの方が楽でしょうし、余計な重荷を背負うこともない〉
今ならまだそうさせることもできる。
誰もが真実だと思っていても、レクティファールやヘスティはそれを認めていないのだ。ただの友

人であり、その場しのぎの嘘だったということにすればいい。
〈ただ、それが正しいとは思いません。善悪と正誤は、なんら繋がりを持つものではないのですから〉
世の中でどれほど正道とされることでも、普遍的な善であるとは限らない。
人々がどれほど憎み、悪と断じることであっても、絶対的な悪であるとは限らない。
虚像に現実感を与えるためにひとりの女性の人生を用いることは、今の皇国の価値観では間違いなく悪と判断される。にも拘わらず、ルキーティは間違っているとは言わなかった。
〈どうなさいますか？〉
ルキーティは忠臣としての声で訊ねる。彼女はこのとき、進んで共犯者になろうとしていた。
この国を経済的に発展させるため、多くの人々の人生を変えてきた。これからも変えていく。ならば、ここでひとりかふたりそれが増えたとしても、躊躇う理由にはならない。
〈そうですね……〉
レクティファールは思案する。
今更道徳などは考えない。
摂政としても考えない。
（うん、だいぶ私も悪人になった）

卑怯だと分かっていても、レクト・ハルベルンとして考える。
ヘスティに対して今できることといえば、それだけだった。

「ヘスティさん、どうしましょうね」
レクティファールは腕を組み、〈皇剣〉の演算能力の大半を遮断して考える。人として考えなければならないことだけは理解できていた。
「え？」
「いえ、間違いだったと説明するなら早い方がいいでしょうし」
レクティファールがそう提案すると、ヘスティの表情がわずかに曇る。
それを見ていたタキリが天を仰いだ。
「ええと、やっぱり駄目でしょうか？」
震える声でヘスティが問い返す。
今度は頭を抱えるタキリ。内心では大いにレクティファールを罵倒していたが、それを表に出すことはなかった。
「私は駄目ではありませんが、今回のことは事故のようなものですし。そちらにも色々事情がおありでしょう。重ねて、私の方はろくに話す必要のある相手もいませんが」

「でも、騎士の家柄だと……」
「騎士と言ってもすでに跡継ぎがいますし、私は何かを期待されるような立場ではありません」
ヘスティは戸惑った。
士族相手にとんでもないことをしでかしてしまったと思っていたからだ。
ほとんど付き合いのなかった異性を、本人の承諾もなしに婚約者に仕立て上げる。悪意のあるなしに拘わらず、然るべき場所に訴え出られたら罪になることは間違いない。
レクティファールにその意思がなくとも、彼の家に対して誠意を持って謝罪しなければならないと思っていた。
「あ、あの、わたし！」
そこまで言って、ヘスティは言葉を発することができなくなった。
何と言えばいいのか分からなくなってしまったのだ。
（何でこの人、怒ってないの？）
至極もっともな疑問だろう。
常識的に考えれば、ヘスティがそう思うのは当然だ。仮にレクティファールがヘスティを憎からず思っていたとしても、この状況は完全にヘスティの失敗が引き起こしたもので、それを責める権利がレクティファールにはある。

（助けてもらってばっかりなのに、本当にこれでいいのかしら）
これまで多くの人々に助けてもらったという自覚はある。
そしてこれからも多くの人々の手を借りて生きていくのだろうという予感もある。
だが、今この手を取っていいのか。それは本当に正しいことなのか。
（わたしは、この人をどう思っている？）
せめてそれだけは答えを出さなければならない。
何の躊躇いもなく他人を救うために手を差し伸べることのできるこの男に、自分はどんな気持ちを抱いているのか。
計算、打算、論理的な思考。
研究者として、ひとりの女としての理性が様々な答えを弾き出す。
その中から、ヘスティはひとつを選んだ。
「とりあえず、普通のお付き合いからで……」
「はい」
己に自信はない。
しかし、一度握った手を忘れることもできない。
ならば、この嘘から始まる関係の中で真実を見つけ出そう。

「よろしくお願いします」
そう言って笑う男は少しだけ可愛く見えた。そして、実際に自分よりもいくらか年下だということに気付くのだった。

◇　◇　◇

警察組織というものは大抵どこの国にもあるが、その仕事ぶりは随分と異なっている。
賄賂を受け取って犯罪を見逃すような、ほとんどごろつきと変わらない警衛がいる国もあれば、頑として犯罪者と馴れ合うことをせず、ひたすらに国や君主に忠誠を誓う邏卒もいる。
警察組織の形態も様々で、軍が警察業務を行う国もあれば、複数の官庁がそれぞれに組織を抱えている国、警察とは名ばかりの自警団しかいない国も存在する。
だが、犯罪者というものはだいたいどの国でも変わらない。
罪の犯し方に差があるだけで、行動原理は似たようなものだ。
複数の武装船を抱える海賊から、昨日初めて財布を抜き取った掏摸まで、不正な行為で利益を得ようという原則から外れることはない。

バザーク――『密輸団』と呼ばれる彼らもまた、その犯罪者の一種である。

「やあやあ、よくぞ来なすった」

アルカディス湖の運河側に位置する場所に、ハーディンという島がある。

海運事業の拡大に伴って、皇都では捌ききれなくなった商船を受け入れるために作られた半人工島で、多数の商船が引っ切りなしに出入りを繰り返している。

その島唯一にして最大の街、島の名をそのまま取った〈ハーディン〉の繁華街にある屋外軽食屋で、ふたりの男が握手を交わしていた。

「さすが時間通りだ。元軍人さんは几帳面だね」

「――昔のことだ」

にこにこと笑いながら給仕に手を挙げる老人と、顔に一本、右目を裂くような傷を持った男だ。

老人が纏っているのは一目で仕立物と分かる背広服で、卓に引っ掛けてある杖も皇都にある工房の刻印が入った高級品だった。ただ、衣服を変えるだけで、この老人はもっと若く見えるかもしれない。

それに対し、傷の男の服装は草臥れた狩猟服で、椅子の背に掛けられた外套は色々な部分が解れてしまっている。老人に呼ばれてやってきた給仕は、両者の違いに戸惑いを隠せないようだった。

「ご注文をどうぞ」

それでも静々と注文を受けたのは、この店の教育が行き届いている証拠だろう。
「何か温かい食べ物と黒豆茶を貰えるかな。献立は任せるよ」
「はい、そちらのお客様は？」
給仕に問われ、男は卓に置かれた小さな献立表を一瞥する。
何でもいい、とは思ったが、このような店で言うことではない。
「適当な茶を。琥珀酒を垂らしてくれ」
「はい、かしこまりました」
詳しい品を指定しない客は、多くはないが、いないわけでもない。
給仕は注文そのままを用箋に記すと、一礼して卓から離れていった。
「飲んでもいいのかね？」
「この程度、酒のうちに入らない」
老人は男の言葉に「そうかね」と頷くと、被っていた中折れ帽を卓の隅に置いた。
国民議会議員の顔を総て知っている者がいれば、老人――にしては、議会にいるときの彼は溌剌としているせいか、若々しく見えるが――がキャベンディッシュという名の議員であることに気付いただろう。
だがこの国では、議員といえども、顔はほとんど知られていない。

国民にとって議会とは、一部の者たちが志す貴族への登竜門であり、自分たちの要望を皇王に伝えるための伝言役といった程度の認識だ。
そのため、一部の目立つ議員を除けば、大多数の議員は名前さえ憶えてもらえない。五年一期限りの議員をいちいち憶えるほどの暇を持つ国民はそう多くない。
「それで、私に何か用かね。君ならばこんな老いぼれなぞ使わなくても、三院の知り合いに渡りを付けられただろうに」
キャベンディッシュは片眼鏡を外し、懐から取り出した布で屈曲硝子を磨く。きらりと光を反射したことに満足すると、再びそれを掛けた。
「役人相手ではどこから情報が漏れるか分からない」
「そういう話か。まったく、嫌になるね」
そう文句を口にしつつも、キャベンディッシュの表情はどこか楽しそうだ。
「で、私を通して政府に伝えたいこととは何かね？　殿下に直接となるとさすがに手間が掛かる。できれば宰相閣下の小言ひとつで済むような話だと嬉しいが」
「その判断はお前に任せる。俺たちのような雇われ情報屋が探れる情報など大して当てにはならないだろう」
「私は情報員としての君の腕を信用しているがね」

「俺は俺の腕を信用していない」
その言葉を吐き出したとき、男の感情がわずかに垣間見えた。
それはどろどろとした何かに塗れ、聞く者に怖気を催させる。
「ふむ、それで？」
キャベンディッシュはこれ以上の問答は無用と判断し、先を促す。
男は物入れから折り畳まれた手巾を取り出すと、それを卓の上で開いた。
「これは、宝石……というにはいささか陳腐だね」
灰色の手巾の上にあったのは、深い赤色をした楕円球だった。
見掛けは加工された宝石にも見えるが、ある程度の目利きができれば、それが宝石などではないことが分かる。
「輝きがあまりにも均一に過ぎる。しかし、硝子玉というわけでもなさそうだ」
キャベンディッシュは目を細めてそれを見詰める。
商人としての彼は、これまで多くの商品を扱ってきた。
その中には宝石もあれば、その贋物もあったし、服飾品に用いる人工宝石などもあった。この楕円球の輝きは、人工宝石に似ている。
「これは――」

「お待たせしました」
さらに問いを重ねようとするキャベンディッシュを遮り、給仕が台車を押して現れる。
傷の男は、給仕が卓の上に視線を向ける前にさっと手巾を畳み、再び物入れに仕舞い込んだ。
「それでは、ごゆっくり」
給仕はキャベンディッシュの前に麦麺と野菜の黄金煮と黒豆茶を、傷の男の前に先ほどの楕円球と同じ色をした紅茶を置くと、一礼して去っていった。
キャベンディッシュは給仕の背中を見送り、一度肩を竦めて銀匙を手に取る。
「食べながら聞こうか」
「構わない」
傷の男は紅茶に手を付け、それを一口含んでから、先ほどキャベンディッシュが口にしようとした疑問に答えた。
「あれは我国――〈ガイエンルツヴィテ〉が中原の遺跡で発見したものだ。俺が預かっているのは比較的低価値のものだが」
「古代遺物か。なら、単なる硝子玉でもそれなりの価値がある。しかし、ただの硝子玉なら、君ほどの男を引っ張り出す理由にはならない」
黄金色の澄汁を音もなく啜り、麦麺を千切る。

焼いてからそれほど時間が経っていない麦麺は、口の中に残る澄汁の味をしっかりと吸い取った。
「そうなると、古代遺物としての価値とは別の何かがあるということになるが……」
そこで言葉を止め、キャベンディッシュは男に先を促す。
男は頷き、目の前の老商人にだけ聞こえる声で呟いた。
「反魔導物質結晶」

大きな可能性を秘めた物質でありながら、歴史上、この物質が表舞台に立ったことはない。
現在の技術力では再現することができず、第一次文明やそれ以降の遺跡などからごく稀に回収される以外、入手する手段がないからだ。
アルマダ大陸では、中原にある旧帝国時代の遺跡から回収されたのみで、他では発見されていない。それ以外だと、皇国領内にある遺跡でその痕跡らしきものが発見されたに留まる。
当初、この物質はそれほど重要だとは思われていなかった。しかし、中原諸国が旧帝国時代の遺構をより深く調査すると、この物質が〈概念兵器〉の開発において重要な役割を果たしていたことが判明する。
それが明らかになったとき、遺跡を抱える国は自分たちが手に入れたものの危険性に怯えつつも、傭兵業という国民の血を輸出することでしか国を保てない自分たちを救う救世主になると考えた。

しかし、その考えはほんの一年程度の研究で覆される。
この物質は確かに、旧帝国での概念兵器の研究開発に重要な位置を占めていた。しかしこの物質が用いられたのは〈皇剣〉ではなく、それとは別の方向性で再現が行われていた、もうひとつの概念兵器だった。
そう、起動実験の際に暴走し、旧帝都を消滅させたあの概念兵器である。
「そもそも、概念兵器は旧帝国が開発したものではない。彼らは自分たちの領内にある第一次文明の遺跡からそれを発掘し、元のように再現しただけだ」
傷の男が語る歴史は、旧帝国や概念兵器を研究する者たちの間では常識となっているものだ。旧帝国の技術力を考えると、概念兵器という超兵器を独力で開発できた可能性は皆無に等しい。それを前提にして、様々な文献資料を当たってみれば、件の仮説を裏付けるような記述がいくつも発見される。
一方で〈皇剣〉と呼ばれる概念兵器は、基幹部分がほとんど完全な状態で発掘されたと言われている。必要だったのは、基幹部分を実際に稼働させるに足る莫大な純粋熱量と、根源素、そしてそのふたつを制御するための外部制御装置だった。
「初代陛下の逸話かね。旧帝国の反政府組織の協力者だった研究者の助力を得て、〈皇剣〉を完成させたという。事実かどうかは分からないが、基幹部分がすでに完成していたという話は聞いたことがある」

概念兵器の基幹部分。それをひとことで表すならば、時空と物質への干渉機能だろう。発見時に一抱えほどの金属筒に収められていた白い砂――休止状態の極小生体機械群は、どこにも損傷がなく、そして当時の技術者たちはそれ以上手を加えることができなかった。

「そこで、先ほどのアレが問題になる。〈皇剣〉とは別に旧帝国が建造したもうひとつの不完全な概念兵器。その起動にも膨大な純粋熱量が必要で、当時それを可能にするものは、同じように遺跡から発掘された反魔導物質結晶しかなかった」

反魔導物質結晶は特定の魔素と接触すると猛烈な反応を起こし、巨大な熱と光を発する。旧帝国の技術者はそれを利用したのだ。

「ふむ、成功したのかね？」

「さてな。このあたりまでは遺跡の資料から分かったが、実際にそれが行われたのかは分からない」

反魔導物質結晶が発見された遺跡の資料だと、遺跡となった施設から旧帝都に反魔導物質結晶が複数個送り出されたことまでしか分からなかった。

しかしその記録と実際の歴史を照らし合わせれば、反魔導物質結晶を用いた起動実験が行われた当日に旧帝都が消滅した可能性は高いと考えられた。

「――君が無駄な話を好むとは思えない。となると、反魔導物質結晶とやらがこの国に運び込まれたということかね」

口元に付いた麦麺の滓を拭き取ったキャベンディッシュが、黒豆茶に手を伸ばしながら訊ねた。

「そうだ。我国の貿易商が送り出した」

「なるほど、それは問題だ」

反魔導物質結晶は通常の方法で売買をすることができない。高威力の兵器への転用が可能であり、各国の安全保障に大きな影響を与えるためだ。

「遺跡は〈ガイエンルツヴィテ〉の管理下にあるが、反魔導物質結晶については色々な利用方法が考えられるため、〈ガイエンルツヴィテ〉が都市同盟に国営企業を置いて、そこに管理を一任していた」

「確かに、下手に本国に置いておくよりは安全かな。同盟商人は利に敏い。それも十年、二十年先の利益を見据えることができる。目先の金に囚われて妙な真似をする者は少ないだろうね」

「少ないだけで、まったくいないわけじゃないがな」

傷の男は紅茶を飲み、今頃自国で右往左往しているであろう同盟評議会の連中を嘲笑った。どうということはない。身内からろくでなしが出てしまい、それを内々に収拾するために彼が派遣されたのだ。

（引退した老いぼれを引き摺り出したんだ。彼らには相応の代価は支払ってもらうさ。それが商人ってものだろう？）

目の前にいる商人上がりの政治家に話を持ちかけたのは、評議会に対する意趣返しの思惑が多分にあったからだ。

国のために命を懸けることに異論はないが、お偉方の利益のために差し出すものなど何一つ持ち合わせていない。

（せいぜい今のうちに楽しんでおくがいい。騒動が終わったあと、皇国から届く請求書の金額を見るまでは）

「君の信頼はこの上なく嬉しいが、私も商人の端くれだ。この情報を使って荒稼ぎするとは考えなかったのか？」

片眼鏡の向こうにある灰色の瞳は、笑みの形に隠されながらも鋭さを失っていない。皇国の商人として都市同盟の同業者と戦ってきたのだ。彼の視線は、軍人のそれと較べてもいささかも劣るものではなかった。

傷の男はその視線に懐かしさを感じ、わずかに声を和らげる。

「家族を売っても国だけは売らない。お前が言ったことだ」

「――まったく、これだから昔なじみは始末に負えない」

キャベンディッシュは溜息を吐きながら、卓の上で指を組んだ。

「あらゆるものを売った私が、ただの金の亡者ではなく商人であるために決めたことさ」

「だからこそ、俺はお前を信用している。反魔導物質結晶はそれ単体でもかなり危険な代物だが、場合によってはより大きな火種になり得るからな」

概念兵器の起動に必要な熱量は、使い方を変えるだけでもっと別のものを動かす力にもなる。

「結晶の研究をしている連中の話では、各国で開発されている次世代型の動力機関の起動装置として使用することもできるらしい」

「魔素に頼らない動力炉と言われているあれかね」

魔導炉は動力機関としてかなり優れた性能を持っている。魔素さえ安定供給できれば、機械的寿命までほぼ無限に動力を生み出し続けることができるからだ。

そのため、魔導炉が動力機関として開発されてから数千年、それに代わるものは作られなかったと言っても過言ではない。稼働方式の変更などにより、高出力高効率化が行われてきただけだ。

だが、魔導炉には開発以来克服されていない、致命的な構造的欠陥があった。

魔素がなければ作動できないという一点である。

ただし、現在に至るまで、この世界において魔素が存在しない環境下で動力炉を使用する場面はほぼ存在しなかった。そもそも魔素が存在しない環境が人工的に作られない限り存在しないのだから、当然と言えば当然かもしれない。

とはいえ、魔素が今後も常に供給される保証はどこにもなかった。現代に存在する大半の国家が魔導炉に依拠している事実は、魔導炉が使用できない環境になった場合、自国の崩壊を防ぐ手立てがないことを意味する。

近代になり、各国で魔素に拠らない動力機関の研究が活発化した。そのもっとも大きな要因はふたつ、イズモ神州連合が保有する遺跡戦艦の主機関が魔導炉とはまったく別の動力機関であると判明したこと。そして、自分たちが見上げている太陽が、外部からの供給を一切受けずに膨大な熱量と光を発し続けていると判明したことだ。

特に遺跡戦艦の主機関は、この世界でもまったく問題なく稼働している。魔素を用いず、同規模の魔導炉を凌駕する動力機関が存在する――それだけでも十分に研究を行う理由になった。

「確かこの国でも研究は行われていたな？」

「予算が計上されているから、調べようと思えばいくらでも調べられるが、確か『次元機関』という名で呼ばれていた。原理などは私にはさっぱりだがね」

「エリュシオンで聞いたものは『反応機関』、ウォーリムでは『太陽機関』。どれも魔素を必要としない点では同じだが、起動にはどうしても巨大な熱量が必要になると言われている」

「イズモのあの艦の主機関は確か……」

「『縮退機関』。現状では、最大出力がどの程度かまだ分からないらしい。うっかり暴走させたらとんでもないことになるからな」

そうした理由で、〈天照〉には大気圏内での使用に大きな制限が掛かっている。かつて〈皇剣〉と真正面から衝突したときも、互いに全能力の半分も発揮していなかった。

「確かに、どこの国も欲しがる理由はあるね。それで、積み荷の宛先はどこなのか、分かっているのだろうか？」

「皇国を出たあとは、イズモに向かうことになっている」

しかし、最終目的地かどうかは分からない。

反魔導物質結晶は様々な分野に応用が利くため、それを必要とする者たちを推測することが困難だった。

「我々としては、何としてもこの国で品物を押さえたい。ここなら摂政の意向ひとつで多少強引なこともできるはずだ」

一方、イズモ神州連合は各地の領主が強い力を持っている。畿内ならばともかく、それ以外の地にある港に入られては、迂闊に手が出せなくなってしまうだろう。

「私の一存ではそこまで約束することはできないよ。確かに私が直接、事の危険性を説くことはできるし、殿下も聡明な方ではあるから、君が望むような形になるとは思うが……」

何かが足りないのだ。

国を動かすにはほんのわずかな力があればいい。その力を正しい一点に掛けることができれば、どれほど巨大なものでも動かすことはできるのだ。

それでもなお、キャベンディッシュは不安だった。

「どうにも話の都合が良すぎる気がするのだよ。我が友」
「誰かが裏で糸を引いているとでも言うのか？　この国で一度荷下ろしをするのも、その人物が考えたことだと」
「分からない。単に私が臆病なだけかもしれない」
「――いや、お前のそういうところも信用に足る理由のひとつだ。しかし、お前の疑問を解消するだけの時間はないぞ」
そう言って傷の男が差し出したのは、半分に折られた用箋だった。
キャベンディッシュがそれを受け取り指先で開くと、積み荷が皇国へと到着する日付が記されていた。
「あと三日、か」
キャベンディッシュの呟きを聞きながら、傷の男は立ち上がる。解れた外套の襟元をたぐり寄せた。
「皇国で五日ほど留め置かれたあと、イズモへと送られることになっている。それと、俺以外にも同じ目的でこの国に入り込んだ奴がいる。もっとも、本人は何も知らされないまま、国から盗まれた研究資料を奪還するつもりらしいがな」
「それはまた、面倒なことになりそうだ」
「そうでもない。所詮は小娘さ。適当にあしらってやればいい。――では頼むぞ、我が戦友」

くるりと身を翻し、男は人々の行き交う雑踏の中へと消えていく。
男の姿を見送り、キャベンディッシュは湖の向こうに見える皇城の尖塔を見詰めるのだった。

皇国の地方都市で生まれたキャベンディッシュの家は、家とは名ばかりの荒ら屋だった。比較的裕福な者が多い皇国にあって、彼は社会のもっとも低いところにいた。
ただ、他国の貧民に較べれば幸福な幼少期だっただろう。学校に通うこともできたし、仕事もあった。
しかし、貧しさを知る彼は商人としての立身を志し、丁稚として皇都の商会に潜り込む。そこで商人としての才能を開花させ、やがてその商会の一人娘を妻として娶る。
思えば、それが彼にとっての人生の絶頂期だった。
その後、武器や奴隷の取引にまで手を出し、商人仲間から『金のためには己の魂さえ売る』と言われることになる。他人を蹴落とし、際限のない富への渇望に身を任せた。
妻が病気に倒れたときも、新たな販路を開拓するために各地を飛び回っており、決して家に帰ることはなく、妻の最期にさえ立ち会わなかったのである。
妻の死の報せを聞き、慌てて戻ったときには総てが遅く、彼は子どもたちに詰られ、同時に同業者から『金のために家内を売った』と悪罵された。

立ち読みサンプル
はここまで

もはや商人としての彼を信用する者はいなかった。
（当然だな。私は多くのものを切り売りしすぎた。だからこそ――）
「戦友。私には過ぎた言葉なんだよ、ギィル」
結局彼は妻の実家から追い出され、身一つでやり直すことになる。そのとき拠点としたのが都市同盟であり、先ほどの男と知己を得たのも同じ時期だった。
「君と出会ったことが、私の人生のうちで、数少ない幸福なのかもしれない。残りの幸福は、国を売らずにいたことか」
商人としての彼のもとには、皇国の機密を売って欲しいという申し出が引きも切らなかった。自分も大身になったものだと喜んだが、あとになって考えれば、自分の悪名がそれをさせたのだと分かる。
「国さえ売ると思われていたのだから、大した悪党さ。こんな小心者を随分高く買ってくれたものだよ」
キャベンディッシュは黒豆茶を飲み干すと、伝票の上に会計よりもいくらか多目に硬貨を置く。そして外套を羽織って杖を手にすると、帽子を目深に被った。
「さて、元小悪党がどの程度役に立てるかな」
こつり、と杖を突きながら歩き始めるキャベンディッシュ。先ほど男が消えていった方向を一瞥し、皇都に向かうべく船着場へと足を向けた。

◇　◇　◇

友好国の留学生を各地の学び舎に受け入れる皇国の制度の歴史は古い。
建国当時、皇国の周辺はまだ混乱が続いており、まだ国としての体裁を得ていなかった少数民族が、皇国の庇護を求めて有力者の子女を人質として差し出した。それを受け入れる名目が留学であり、実際に皇国を訪れた者たちには、皇国が提供しうる最高の教育が施された。
皇国が興るまでは、種族ごとの居住地があるばかりだった大陸南東部。蛮族の住まう地と呼ばれ、そこの教育など高が知れていると人々は内心で侮っていた。だが、第一次文明の遺産が残り、皇国に住まう千年以上も生きる者たちが培ってきた様々な知識は、旧帝国の中心地だった中原などと較べても、勝るとも劣らない水準にあった。
人々の生活の中で形成されていく社会学などの一部を除けば、皇国での教育は大陸でもっとも高度だったとさえ言える。
留学生の受け入れは、皇国への理解を深めてもらうだけでなく、それ以上に大陸全土での教育水準の底上げにも繋がった。そして現在、皇国を訪れる留学生の数は増え、年間八万人とも言われている。
半年程度の短期留学から数年がかりの長期留学まで。内容も、学業は元より農業や商業、工業など